
ジェフ・ブリッジズ
ロビン・ウィリアムズ
フィッシャー・キング
RADIO CITY MUSIC HALL
THE FISHER KING

ROBIN WILLIAMS　　JEFF BRIDGES

フィッシャー・キング



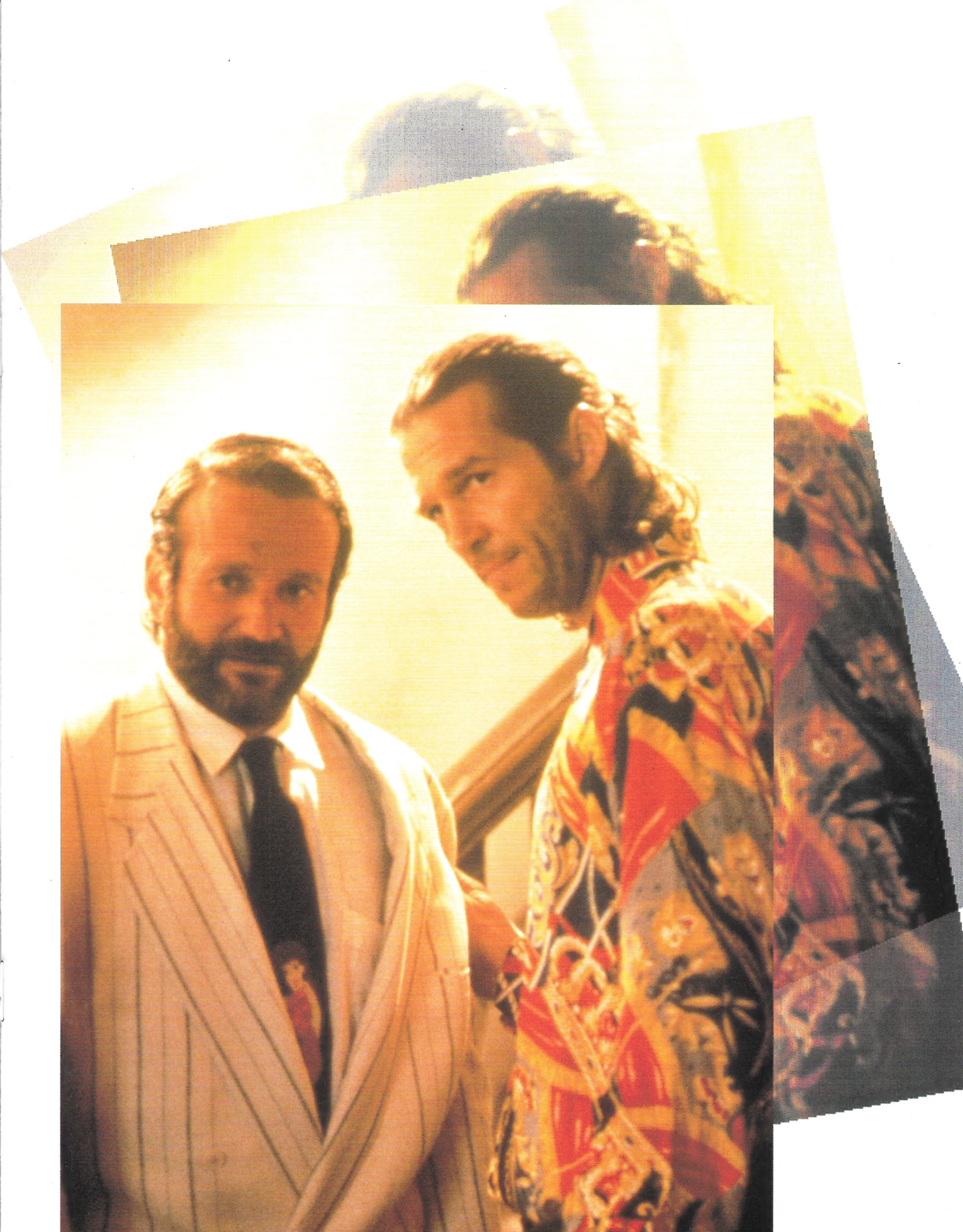
人気DJ（ディスク・ジョッキー）と
エリート教授。
きのうまで
ニューヨークの
「王様」だった
男たち——

WINNER OF THE SILVER LION AWARD VENICE FILM FESTIVAL 1991

本年度ゴールデン・グローブ賞受賞／最優秀主演男優賞ロビン・ウィリアムズ（ミュージカル コメディー部門）／最優秀助演女優賞マーセデス・ルール
'91ロサンゼルス映画批評家協会賞受賞／最優秀助演女優賞マーセデス・ルール
'91ベネチア国際映画祭・銀獅子賞受賞
本年度アカデミー賞主要5部門ノミネート

1991年度／ヒル＝オスト・プロ作品／カラー／ビスタ／7巻（3753m）／2時間17分／翻訳：戸田奈津子 DOLBY STEREO
トライスター映画作品／コロンビア トライスター映画配給

A TRI-STAR RELEASE
© 1991 Tri-Star Pictures, Inc. All Rights Reserved.
TRI STAR



INTRODUCTION



あふれるイマジネーションが興奮を誘い、激突する〝2大演技〟が感動を呼びおこす。全米がこぞって湧き返った現代ニューヨークの奇跡のドラマ。いま、'91年ナンバーワン・ムービーが登場する──。

ジャック・ルーカス。過激なトークが売りもののスーパーD.J.として、世紀末ニューヨークに君臨した時代の寵児。しかし、放送中に発した不用意な言動がもとで、忌わしい事件を誘発し、奈落の淵へ転落する──。

ペリー。またの名をヘンリー・ソーヤー。元中世史の教授だったという彼は、3年前、ある悲劇的事件に見舞われてから人が変り、過去を捨ててホームレスとなった──。

共に精神に深い痛手を負った男たちが、ニューヨークの底辺で出会い、奇妙な友情で結ばれた。

「一緒に〝幻の聖杯〟の探索を…」

ペリーのユニークな誘いに最初はとまどいながらも、次第に彼の不思議な幻想世界へ引き込まれてゆくジャック。そんなペリーの運命をなんとか変えてやりたい。ペリーの悲劇の間接の加害者としての負い目が、ジャックを駆り立てる。それは同時に、自身の人生をやり直し出来るかもしれない大いなる賭けでもあった…。

笑いと哀しみ。幻想とリアリズム。風刺とラブストーリー。そして、最後に仕掛けられた圧倒的感動。全米'91年秋の話題を独占したファンタスティック・トラジック・コメディである。

マス・メディアの恐怖、あふれるホームレスという社会的テーマに、ユニークな中世志向を加え、独自の幻想的映像を展開したのは、「未来世紀ブラジル」「バロン」で観客を幻惑した奇才テリー・ギリアム。新人リチャード・ラグラベネスの脚本をベースに、いつものSFXを駆使したスペクタクル調を抑え、心理描写を重視した〝正統派〟の演出ぶりを見せていることがファンならずとも大注目だ。

キャストは、過去を持つホームレスのリーダー、ペリーに扮し、過去最高の演技と絶賛を浴びているのが、「レナードの朝」「キャデラック・マン」に続いて絶好調を持続するロビン・ウィリアムズ。悲劇と喜劇の両極を自在に往き来する至芸に、早くもアカデミー賞濃厚の声が湧き起っている。

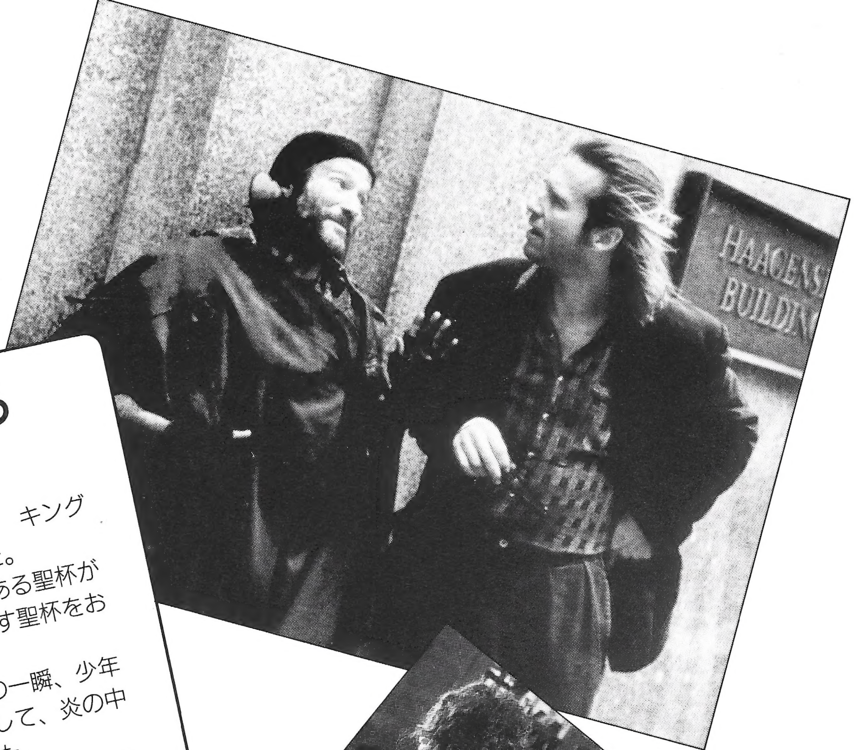
対して、栄光から転落したスーパーD.J.、ジャックに扮し、ひと皮むけた演技を見せるのが、「タッカー」「恋のゆくえ」のジェフ・ブリッジズ。ギリアム監督から強い要請があっただけあって、陰影のある役作りの成果はウィリアムズに優るとも劣らず。

これに、ペリーが憧れる孤独な都会娘リディアの役で、「ガープの世界」「メイド・イン・ヘブン」のアマンダ・プラマー、ジャックを愛する下町のビデオ店主アンに「ビッグ」「愛されちゃってマフィア」(V)のマーセデス・ルールがそれぞれ好演。くっきりとした性格描写で、ウィリアムズ、ブリッジズの演技を受けとめている。

製作は「デッドゾーン」「ベビーシッター・アドベンチャー」などの女性ヒット・チーム、デブラ・ヒルとリンダ・オスト。

プロダクション・デザインをウディ・アレン作品で手腕を発揮し、「インテリア」「ナチュラル」でアカデミー賞にノミネートされたメル・ボーン。

ニューヨーク・ロケによる撮影は、「未来世紀──」「バロン」でギリアム監督と組み、大ヒット作品「バットマン」で注目すべき成果を見せたロジャー・プラット。そして音楽を「遠い夜明け」「危険な関係」のスコアでオスカーにノミネートされた売れっ子ジョージ・フェントンがそれぞれ担当した。



セントラル・パーク:パリーが語る ”フィッシャー・キング”の伝説

フィッシャー・キングのお話を聞いたことがあるかい？　キングが少年の時、胆だめしのためにひとり森で一夜を過ごした。眠っている間に精霊が夢枕に立ち、神の慈悲の象徴である聖杯が火の中から現れた。そして声が聞こえた「人の傷をいやす聖杯をお前に託す」と。

しかし、少年が抱いていたのは権力と栄光の夢。その一瞬、少年ではなく、神に近い不死身の人間になったような気がして、炎の中に手を伸ばすと聖杯はかき消えて手にひどい傷を負った。

成長するにつれ、傷は悪化して、自分がなぜ生きているのかわからなくなった。人も自分も信じられず、愛し愛される事もなかった。苦しみに絶望し、死の床に…。

ある日、気のいいうつけ者が城に迷い込み、相手が王とは知らずに苦しんでいる男に声をかけた。「一体どうなさった」。王は答えた「水をくれ。のどが焼けるようだ」。男はそばにあった杯に水を満たしさし出した。

水を口にすると王は痛みが和らぐのを感じた。見るとそれは長年、捜し求めていた聖杯だった。「誰もさがせなかった物をなぜ、お前が？」男は答えた「俺はただ、あんたが喉がかわいているから水を…と思っただけだ」。

（王は少年の時以来初めてあの時と同じように神に近づいた気がした。それは神の栄光に触れたからではなく、うつけ者の同情を感じたからである）

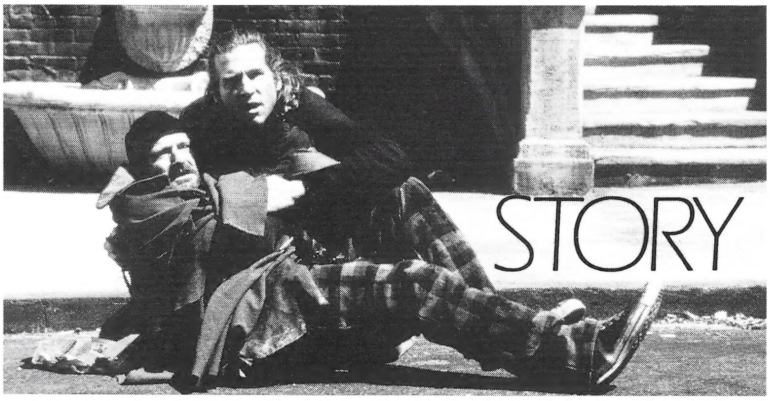
※映画本篇より








マンハッタンに月が輝く夜、
哀しい過去を分けあった
ふたつの心が、ひとつになる…
フィッシャー・キングの
素敵な物語のように——



ニューヨークでジャック・ルーカス（ジェフ・ブリッジズ）を知らないといえば、そいつはモグリに決まってる。ジャックは今をときめくスーパーD.J.。超人気番組“ジャック・ルーカス・モーニングショー”におけるワイルドで過激なトークは、ニューヨーカーのハートをがっちりつかみ、オピニオン・リーダー的存在で電波の世界に君臨していた。

ある日、栄光と絶頂の極みにあったジャックの名声が、突然音を立てて瓦解した。放送の中で発した不用意な一言が恐ろしい現実となってはね返ったのだ。「ヤッピーたちを殺せ」。狂気に近い孤独な一聴取者が、ジャックのコメントを忠実に実行した。犠牲者７人もの大量虐殺を伝えるTVの画面を、悪夢の思いで見つめるジャック。その瞬間、彼の思考は停止し、その魂は地の底へ吸い込まれていった……。

それから３年。ジャックは、スターだった頃の面影のかけらもない見るも無惨な生活に墜ちていた。事件の後遺症でウツ病になり、道を歩けば子供からホームレスと間違われる。生活の基盤は、世話になっているアン（マーセデス・ルール）の経営する下町のビデオ屋の店番だが、実体は完全な生活破綻者だった。

ある晩、泥酔してイースト・リバー沿いを歩いていたジャックは、暗闇で２人組の暴漢に襲われた。突然、ロビン・フッドのように現われた男が、２、３人の仲間とともに暴漢に立ち向かい、ジャックを救けた。“ロビン・フッド”は、パリー（ロビン・ウィリアムズ）という名のホームレスだった。

翌日、ジャックはパリーの棲み家となっているらしいどこかのボイラー室で目が覚めた。壁の一面には中世の城と騎士と少女の姿が描かれ、もう一面には馬に乗る悪魔〈赤い騎士（レッド・ナイト）〉が描かれている。部屋の中には無数に積まれた書物。この男は一体何者なのか？　いぶかるジャックを尻目に、パリーとその仲間たちは奇妙な話を切り出した。ジャックこそが、パリーたちが続ける“聖杯探し”の力になる人物だという。その“聖杯”とは、城のような大邸宅に住むニューヨークの大富豪ラングドン・カーマイケルの手元にあるという。訳の解らない話を聞かされて気味悪くなったジャックは、ほうほうの体でその場から逃げ帰った。

それから間もなく、ジャックはホームレスたちの話から、パリーについての意外な事実を知った。彼は元中世史を専攻する大学教授で、本名はヘンリー・ソーヤー。３年前にレストランで食事中、狂った男に妻を含めた７人が殺害される場に居合わせて以来、人が変ったようになったという。

ジャックの中で忌わしい罪の意識が甦る。しかし、悲劇に見舞われて人が変ってしまったパリーとの出会いは、ジャックの人間性を変えた。彼はどうにかしてパリーの運命を変えてやりたいと思い始めた。

パリーには、聖杯の他にもうひとつ憧れの対象があった。出版社に勤めるリディア・シンクレア（アマンダ・プラマー）という若い孤独な女性だ。パリーの奇妙な世界の中では、彼女は高貴なレディであり、彼はそれにかしずく騎士であった。ジャックはあの手この手で何とか２人を引き合わせようとした。やがて、アンを混えた４人でダブルデートを行なう段取りがまとまり、チャイニーズ・レストランで食事をすることになった。奇妙で不思議な食事風景。パリーはリディアのすべてに魅了され、リディアもパリーに好意を抱いた。そんな２人を見てジャックとアンも寄り添う。

その夜、リディアと別れたパリーの前に、いつもの悪夢の象徴“赤い騎士”が現われた。恐怖に身悶えながら逃げるパリー。さまざまな幻想が彼を襲い、苦しめる。いつしか橋の下に来た時、獲物を待っていた暴漢たちがパリーに襲いかかった……。

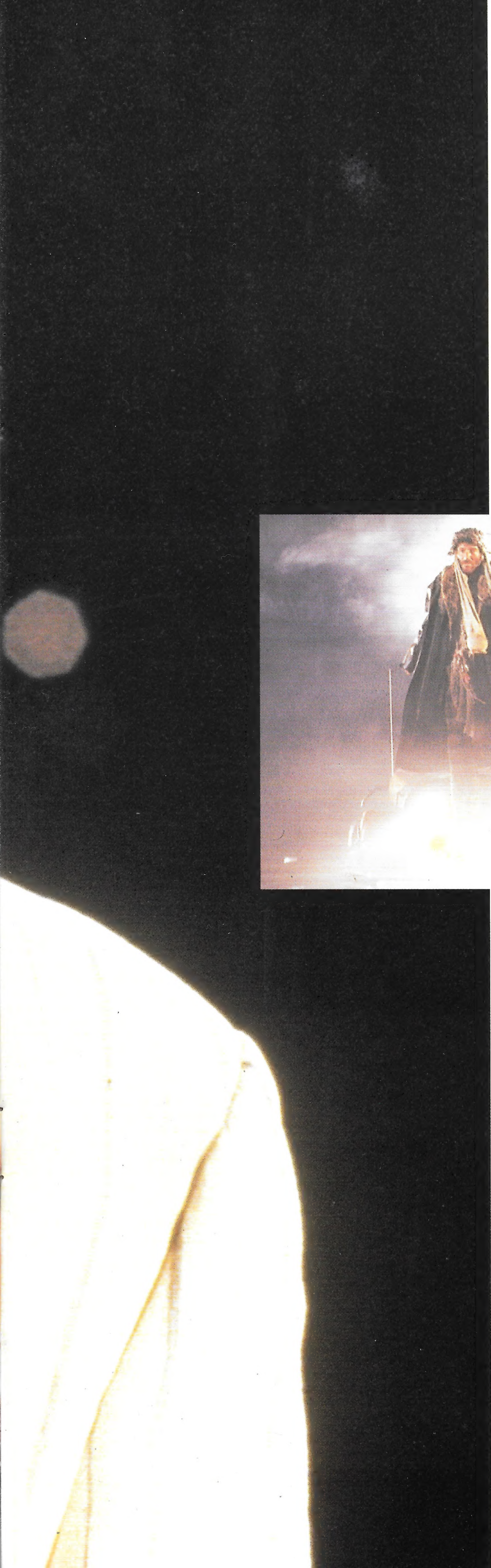
そうとは知らず、気分爽やかな朝を迎えたジャックは、再び仕事への意欲に燃えていた。彼はアンに１人でやり直したいと告げた。そこへ病院からの電話。駆けつけたジャックが見たものは全身を包帯で覆われ、昏睡状態に陥ったパリーの姿だった。

それから半年後。ジャックは仕事に復帰した。彼の番組は再び圧倒的支持で迎えられ、富と栄光は再びその手に戻ってきた。が、なぜかその心の奥は虚しかった。

ある時、ジャックは偶然にも富豪カーマイケルの写真を見た。その瞬間、ジャックの頭にパリーのことがよぎった。いまさらながら自分の愚かさを覚ったジャックは、パリーの姿を必死で探し求めた。パリーは６ヶ月前と変らず、意識のない肉体を病院のベッドに横たえていた。愛するパリーを哀れんで、リディアは毎日のように病院に通いつめていた。

呼び掛けても応答のないパリーを見て、ジャックの中に、ある“計画”が浮かび上がった。それはパリーのみならず、ジャック自身の真の救済を賭けた捨身の冒険だった——





ロビン・ウィリアムズ（パリー） Robin williams



夢想の世界に生きる謎のホームレスを演じて、『グッドモーニング・ベトナム』『いまを生きる』に次いで３度目のアカデミー賞候補となった、絶好調男ウィリアムズ。1952年７月21日イリノイ州シカゴ生まれ。カリフォルニアのクレアモント・メンズ・カレッジで政経を専攻した後、ケントフィールドのカレッジ・オブ・マリンで演技、ジュリアードでドラマを学んだ。

卒業後、サンフランシスコのコメディ劇団に参加し、ナイトクラブでスタンダップ・コメディアンとして人気を博す。76年にＴＶのキャスティグ・ディレクターに発掘され、人気シリーズ「Laugh-In」でＴＶデビュー。続いて「ハッピー・デイズ」にゲスト出演し、宇宙人モークを演じて代表版となり、これがきっかけで「Mork and Mindy」（78〜82）が生まれ、一躍全米の人気者となった。

80年、アルトマンの『ポパイ』で映画に主演デビュー。続く『ガープの世界』で評判となり、スターダムに上った。『グッドモーニング・ベトナム』以来、演技派としても評価を確立した。ギリアムとは『バロン』のゲスト出演に続く顔合わせである。なお、次回作はスピルバーグの話題の大作『フック』で、成人したピーター・パンを演じた。

78年に結婚したヴァレリー夫人との間に娘ザカリーをもうけたが、その後離婚。また、博愛運動、ホームレスやドラッグの問題にも取り組んでいる。

◆フィルモグラフィ

79：ところかまわず立てちゃダーメ!!［V］（Can I Do It... Till I Need Glasses?／I. ロバート・レヴィ）80：ポパイ　82：ガープの世界、カエルの王［V］（TV「フェアリー・テイル・シアター」より／Tale of the Frog Prince／エリック・アイドル）83：サバイバー［V］（The Survivors／マイケル・リッチー）84：ハドソン河のモスコー［V］（Moscow on the Hudson／ポール・マザースキー）86：がんばれ／ロケッツ［V］（The Best of Times／ロジャー・スポティスウッド）、クラブ・パラダイス［V］（Club Paradise／アイヴァン・ライトマン）、ミッドナイト・ニューヨーカー［V］（Seize the Day／フィールダー・クック）87：ディア・アメリカ（ナレーションのみ）、グッドモーニング・ベトナム　88：バロン　89：いまを生きる　90：レナードの朝、キャデラック・マン　91：愛と死の間で（友情出演）、フィッシャー・キング、フック

テリー・ギリアム監督と主演の二人



〝テリー・ギリアムほど扱いにくい作家はいない〟というのがこれまでのハリウッドの評価であった。

〝『未来世紀ブラジル』、『バロン』と作品は確かにすばらしい。ヴィジュアルな構成力と演出力は並み並みならぬものだ。しかし、その力量をはるかに越えるトラブルをもたらす危険があるからね〟と、かつてハリウッドの某プロデューサーは筆者に語ったもんである。

確かに『未来世紀ブラジル』のときは『バトル・オブ・ブラジル』、『バロン』のときは『ルージング・ライツ』と2冊の本が書かれるほど、ギリアム作品にはトラブルがつきまとった。作品の長さの問題、予算の大幅な超過と、ハリウッドのタブーふたつに触れれば悪名も高くなる。だが、この2作品の〝事件〟はすべてギリアムの責任だろうか。彼の手綱をしめるべきプロデューサーはなにをしていたのか——!?

そんな素朴な疑問を頭に浮べつつ、彼の新作『フィッシャー・キング』をアメリカでみた。これは彼にとって画期的な作品である。初めて他人の企画、脚本を引きうけて、しかも現代NYを舞台にしたお話とくる。いわば〝プロの〟監督としての力量を世に問うたかたちである。

ところがこれがすばらしかった。人間の機微と苛酷な現実をきっちりと描き出しつつ、随所で〝ギリアムした〟映像が顔を出す。〝愛と絆を謳った〟といっても、ハリウッドの甘っちょろさとは一線を画すおとなの寓話。今さらながらギリアムの力技に圧倒されてしまったのだ。

「いやァ、『バロン』のトラブルが尾を引くわ、続くプロジェクトも暗礁にのりあげる。もうすっかり映画界にいやけがさしちゃってね。映画づくりなんかやめようと考え始めた頃にこの脚本が送られてきたんだよ。半信半疑で読みだしたら、もうとまらない。これはなにがなんでも監督したくなっちまった」

映画をみた翌日にギリアムとの会見。これまで2度ほど、彼にインタビューしているがこれほど機嫌のいいことはなかった。

「なんたって、脚本のリチャード・ラグラベネスのみごとなセリフとストーリーテリングにとどめをさす。まるでぼくの脳みその中に入りこんだようにピッタリくる脚本だった。それにこのプロジェクトなら1年で完成すると思えたんだ。ほら、これまでの作品は完成するまでに3年以上かかってしまっている。もう、ぼくも51歳、決して若くないもの。人生は短い。ここらでシンプルな映画に挑んで、生活のリズムを変えたかったわけさ。

もうひとつ、いっておけばハリウッドの連中に対してこの作品を通じ〝みてくれよ、ぼくはきみたちが考えているトラブルメイカーでもなければ、怪物でもない。ぼくは、予算以内、仲よく、映画がつくれるんだ〟ってことをアピールしたかったこともある」

この作品は当初、ジェームズ・キャメロンの企画だったという。ところが『アビス』の撮影で精力を使い果し、結局はキャンセル。ふたりの女流プロデューサー、デブラ・ヒルとリンダ・オストは主役に決まっていたロビン・ウィリアムズに相談し、彼の勧めでギリアムに決めたいきさつがある。

「テリーにあってみると、彼が決してやりにくい人ではないと分ったの。むしろ苦労したのはテリー起用を反対するメジャーの人たちを説得することだったワ」とデブラ・ヒルは語っているが、このふたりのサポートの成果がギリアムのガンバリとなって結実しているのだ。

「この脚本はハリウッドから出てきたとは思えない内容なんだよね。ふつう、ハリウッドのメジャーシステムの中だと、〝危険な輝き〟をあたりさわりのないものに変えてしまうがこれはそうではなかった。プロデューサーに定見があったわけだ。金儲けの論理しか通用しないハリウッドには珍しい人たちだよ。

ここにはホームレスやエイズといった社会問題も出てくるが、それに対する答が用意されてはいない。そうした問題を現実としてうけとめ、苛酷な世界でどう生きるべきかを描いている。恋と友情。うむ、ぼくとしては〝残る映画〟だと自負しているんだがね」

また映画づくりが楽しくなった自分が恐いよとギリアムは笑う。最後に、〝これはまごうことなきギリアム映画〟と告げて、はつらつと席を離れた。さァ、続いてロビン・ウィリアムズの登場だ。

この作品で、彼は忌わしい過去から逃れるために、まったく新しいキャラクターを生きる元大学教授を演じている。

「引きうけた理由は明快だよ。脚本、これに尽きる。ぼくの役ばかりか、登場するすべての役がくっきりと立っている。これを逃がすテはないと思った」

スクリーンと同じ、人のいい熊のような顔をしてウィリアムズは真摯に答える。この温かい雰囲気がこの上ない魅力なんだなァ。

「このキャラクターは2重人格的だよね。かつてぼく自身もこんな感じだった。ぼくは演技をすることで、人生にまっこうから立ち向かうことをさけていたんだ。だから共感もひとしおだったよ。主人公は新しい名を使い、人生を楽しむキャラクターに生まれかわる。けれども妻の死が脳裡から離れることがない。そう、ぼくが彼になる危険性は充分にあったといえる」

どうしようもない悲しみを内包しながら、あえて大都会のドン・キホーテでいようとする主人公。ウィリアムズの熱演で、みごとな存在感が与えられて

稲田 隆紀

いる。

「俳優というのはユニークな仕事だと思うよ。自分の一要素を、キャラクターという他人の中で自由に演じて、自分自身を開放できるんだからね。役を演じることで〝ああ、こういう風に行動すると、ああなっちゃうんだ〟なんてシュミレーションもできるわけだし——。もっとも、自分の内面に大きく関わっている役だと、心しないと自己崩壊する危険性もあるんだけれどもね」

さて、ギリアムとウィリアムズは『バロン』で顔をあわせているが、ジェフ・ブリッジズは初のギリアム体験。ギリアムいわく〝ぼくとロビンだけだと、テンションが高くなって、とんでもないコメディになる危険性があった。そこで、ロビンとは水と油的なキャラクターを起用しようと考えたんだ。ぼくたちのテンションを地につけるクールな存在。ちょうど『恋のゆくえ　ファビュラス・ベイカー・ボーイズ』をみたことから、ジェフならピッタリとふんだ〟。ところが当のブリッジズは引きうけるまでかなり悩んだという。

「演る自信がなかったんだ。ぼくにはほど遠いキャラクターだからね。ただ断るにはしのびない。なにしろテリーが監督をするというし、脚本もすごいもの。そこで自分なりにリサーチをしたり、テリーと討論したりと、キャラクターに対する理解につとめた。そのうちに、こうした精神的汚れ役もチャレンジだと思えてきたんだよ。このＤＪは、成功しているときにはおごりに溢れたイヤなヤツだ。けれどもそのシニカルな皮の中側は古典的なロマンチストといってもいい。なぜだか『白と黒のナイフ』を演ったときの気分になった。あれもチャレンジだったからかな」

いざ撮影に入るや、ギリアムとの仕事は実に楽しかったそうな。

「撮影はジャムセッションに近いと思う。それぞれのメンバーがどんなトーンで仕掛けてくるか、それに反応して自分も〝色〟を出していくわけだ。テリーはひとりひとりがいいプレイをできるように、巧みに環境を整え、雰囲気をつくる。自分の意図を歌わせることに長じているね」

長身、飾り気のない態度に終始するブリッジズもまことに満足そう。まずは全員、納得のいく作品に仕上がったわけだ。

このアメリカでのセッションからしばらくして、アカデミー賞ノミネーションの発表があった。ウィリアムズの主演男優賞、マーセデス・ルールの助演女優賞、脚本賞、美術賞、音楽賞は当然ながら、作品賞、監督賞は完全に無視されている。いかにギリアムが恨みを買っているとはいえ、これはない。かくなる上は、ギリアムの次作『ディフェクティブ・ディテクティブ』に期待するか。これも、今回の脚本家リチャード・ラグラベネスとのコンビ。その完成が楽しみだ。









ふたりのドラマは、やさしくアナーキー







「フィッシャー・キング」二つの恋の物語

いろいろな角度から見られると思うけど、私には、まず恋の物語だった。

ぶきっちょで、とってもまじめな恋と、ほんとは恋をしているのに、本人が気づいていない恋。この、見ている者をハラハラさせる二つの恋を描きながら、人間って、誰かと恋をして結ばれるために生まれてきたんだわ、と思わせてくれる優しさをたっぷりと見せてくれるところが嬉しい映画の誕生だ。

いままで、テリー・ギリアムの映画というのは、子供のころの夢や憧れを忘れていない大人のための刺戟的な夢、と思ってきたのだけれど、今度は、人生の深い味わいも加わって、成熟した大人の気分。見る者の心まで優しく、暖かくしてしまいそうな恋がここにある。

それにしても、ロビン・ウィリアムズのニューヨークのホームレスと、アマンダ・プラマーの孤独なOLの組合せで描かれる恋は、なんて可愛いんだろう、と思ってしまう。そして、あきれるほどぶきっちょ。そのくせ、結構しっかりロマンティック気分を盛りあげているところは、さすが、曲者ギリアムの映画だ。

かつて、ロビン・ウィリアムズの出世作になった『ガープの世界』で、主演のロビンに対して、アマンダのほうは、ほんのワン・カット出演、という形で共演したことのあるふたりが演じるカップルは、もう歯がゆくて、歯がゆくて、赤の他人の私が見ても背中をドヤしつけたくなるほど、もどかしい恋をする。

その始まりは、ロビンの演じるホームレス、パリーの一方的な、ひと目惚れのようだ。ようだ、としか書けないのは、映画が、ロビンの夢中ぶりを先きに描いてしまっているからで、これを見れば、ひと目惚れに決まっている、としか思えない。彼は、きっと、グランド・セントラル駅の出口をヨロヨロと出てくるリディアをひと目見るなり、ドン・キホーテがアルドンサに想いを捧げたように、この人しか愛せる相手はいない、と確信してしまったのだろう。

そう、パリーのリディアに対する想いはドン・キホーテのドルシネア姫への想いに似ている。

16世紀スペインの作家セルバンテスの書いた『ドン・キホーテ』の主人公は、騎士物語の読み過ぎで自分を騎士ドン・キホーテだと思い込み、ただの田舎娘アルドンサを、騎士がその忠誠を捧げる対象である姫君に仕立て、勝手にドルシネア姫と呼ぶのだ。

パリーも、他人の目にはちょっとおかしいリディアを、最高のプリンセスだと思い込んでひと目惚れの恋をした。ぎょうざを挟めずに、くり返し落してしまう彼女を見ながら、「ねえ、かわいいだろう」、とうっとりとした顔のパリー。いつ見てもチャーミングなロビン・ウィリアムズだけれど、このときのうっとり顔はとりわけチャーミングで好きにならずにはいられない。

そして、ついに念願かなってデートをすることになったときの、なんという楽しさとおかしさ／　まったく絶妙のタイミングでドジを踏みまくる彼らは、どんな漫才コンビより呼吸があっている。

彼らの恋が、ロマンティックな騎士の世界を想わせれば、この恋を成立させるのにひと役買った元花形DJのジャックと、すっかり落ちぶれてヒモも同然の彼と暮らすビデオ屋の女主人アンの関係は、きわめていま的で、現実的でもあると思う。

口をついて出た挑発の言葉が、花形DJだった時代におもいがけない殺人に結びついたことで苦しみ続けるジャックは、自分の苦悩に浸りきってアンの愛に気づかなかった。

じつは、彼の挑発がパリーの美しい妻と幸福な生活のすべてを奪った、という人生の皮肉。ジャックは何も知らない。

苦悩に浸りきったまま、自分のことしか考えないジャックは、パリーに危いところを助けられると、そのお礼をしないではいられなかった。ちゃんとお金でケリをつけなければ気がすまない。彼にとって、お礼というのはお金を支払えばすむことで、そこには、人情や感情なんか存在しないのだ。

そんな考え方を、彼を愛して、彼がその愛に気づくまでじっと待ち続けようとしているアンにもあてはめているジャック。彼は、まったく可愛いげのない男。失敗すればイジイジ、グズグズ、苦悩することしか考えないし、自分を必要としてくれる人がいることにも気づかない自己中心的な男。

それでも、タデ喰う虫もなんとやら、パリーがリディアを愛したように、アンもまたジャックを愛して、じっと彼の愛の言葉を待っているのが、これまたもどかしい。

アンはパリーの変形版。こと恋に関してだけは、うぶで引っ込み思案。ということで、アンとジャックの関係は、パリーとリディアの関係を逆にしたもの（もちろんジャックよりリディアのほうがずっと可愛いが）だから、こちらも最後はハッピーでなけれ

渡辺　祥子

ばおさまらない。とはいっても、時間がかかりそう。

その時は、今度もまたパリーのおかげでやってくる。もっとも、パリーが何かをしたからではなく、パリーを見ているうちに、ジャックの目が覚めることになるのだが。

パリーのおかげで、お礼をするということがお金でケリのつく問題ではなく、相手をおもいやり、相手の期待にそうこと、と気づいたジャックには、やっと真の幸福が訪れるのだ。

どちらも長い時間がかかったのちに、やっと、恋と幸福を手に入れた、パリーとリディア、ジャックとアンの恋人たち。

彼らのこの恋のドラマの間に都会の孤独と愛のもたらす歓びを散りばめたテリー・ギリアムは、それらを、大胆で華やかな映像によってより印象的に見せてくれるのが素晴らしい。

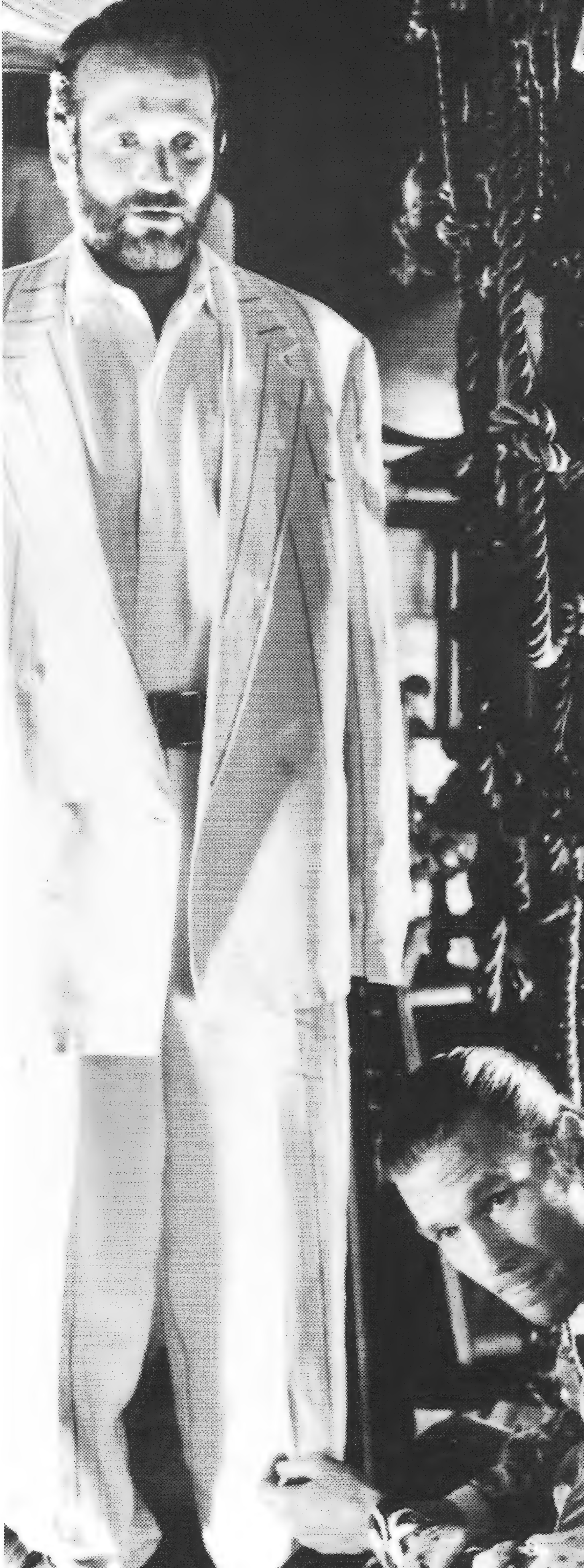
いつものように、まるで谷底をのぞき込んだり、高い建物を仰ぎ見たりする感覚をまじえた映像でニューヨークはマンハッタンの街をとらえているギリアムは、どちらも、血にまみれた暗い過去を持つ男たちを主人公にして、散々苦しめたのちに、幸せな輝やきの中に包み込む。

そして、その幸せを祝うかのように華やかに打ちあげられる色とりどりの花火――。

それともうひとつ忘れられないのが、雑踏のグランド・セントラル駅を、ミラーボールの輝やく大舞踏会場に変えてしまう、という途方もないシーンだ。あの、朝から晩まで人がいるグランド・セントラルの駅でどのように撮影したのかは知らないが、気がついてみたら、誰もがエレガントに、ロマンティックに踊っているのだからビックリしてしまう。

このシーンを考えだしたというだけで、テリー・ギリアムには天才の名をあげたい、と思ってしまった。

最後にふれておきたいのが、ゲイの奇妙な芸人として登場するマイケル・ジェッターのこと。いかにも芸達者な彼は、メリル・ストリープ主演のオフ・ブロードウェイ・ミュージカル『アリス・イン・コンサート』などに出演したミュージカル・スター。一時期、アルコール中毒で埋もれていたところをトミー・チューンの招きで彼の演出する「グランドホテル」に出演。トニー賞の助演男優賞を受賞していっ気に脚光を浴びることになった。見かけからは想像も出来ないタップの名人で、ギリアムは、恐らく彼の舞台を見て起用をきめたのだろう。



ジェフ・ブリッジズ
(ジャック)

jeff bridges





カリスマDJから転落したジャックを演じるのは、『タッカー』『恋のゆくえ』と乗りにノッているジェフ・ブリッジズ。1949年12月4日LA生まれ。父ロイド、兄ボーともに俳優。生後4ヵ月で映画に出演。8才で父のTVシリーズ「シー・ハント」に登場。卒業後、NYのバーゴフ・ステュディオで演技を学び、舞台活動を始める。70年『怒りを胸にふり返れ／』で本格的に映画に進出し、翌年の『ラスト・ショー』で早くもアカデミー助演男優賞にノミネート。以後、骨太な監督の作品に次々出演し、『サンダーボルト』で再度同賞の候補に。『キング・コング』で一躍世界的にも知られ、84年は『スターマン』でアカデミー主演男優賞に候補となり、その確かな演技力を披露。以来、トップ男優の一人として大役を演じるようになる。今回の役は始めは気乗りはしなかったもののギリアム監督のたっての願いで実現した。新作は、製作も兼ねた、エドワード・ファーロング共演の「American Heart」で、息子との交流を図る刑務所あがりの粗野な男を演じた。なお、作曲、絵画、写真と守備範囲も広く、写真の個展も開いている。夫人スーザン・ゲストンとの間に娘ベル（81年生）がいる。

◆フィルモグラフィ

51：The Company She Keeps（ジョン・クロムウェル）70：怒りを胸にふり返れ／　71：ラスト・ショー　72：Bad Company（ロバート・ベントン）、ゴングなき戦い［V］（Fat City／ジョン・ヒューストン）73：The Iceman Cometh（ジョン・フランケンハマー）、ラスト・アメリカン・ヒーロー、ロリ・マドンナ戦争　74：Rancho Deluxe（フランク・ペリー）、サンダーボルト　75：Hearts of the West（ハワード・ジーフ）、Stay Hungry（ボブ・ラフェルソン）76：キング・コング　78：シャレード79　79：American Success Company（ウィリアム・ライカート）、大統領の堕ちた日［V］（Winter Kills／同前）80：天国の門　81：Cutter's Way（イヴァン・パッサー）82：キス・ミー・グッドバイ、トロン　83：カリブの熱い夜　84：スターマン　85：白と黒のナイフ　86：800万の死にざま、モーニング・アフター　87：消えたセクシー・ショット　88：タッカー　89：恋のゆくえ　89：いくつもの朝をむかえて［V］（See You in the Morning／アラン・J.パクラ）、チキンハート・ブルース　90：ラスト・ショー2　91：フィッシャー・キング　92：American Heart（マーティン・ベル）





mercedes ruehl

マーセデス・ルール(アン)

ひたすら、恋するジャックからの“愛の言葉”を待ち続けるアンをハートフルに演じるのは、舞台・映画・TVで活躍するマーセデス・ルール。NYクイーンズに生まれ、メリーランド州シルヴァー・スプリングで育つ。ニュー・ロシェル大学で英文学の学士号を修得後、70年代よりオフ・ブロードウェイで活動を始め、クリストファー・デュラング作の「The Marrige of Bette and Boo」のコミカルな演技が評判を呼び、オビー賞を受賞。以後「メデア」「空騒ぎ」などに出演。79年に映画デビューするが、あくまで舞台中心。

89年は、大ヒット作「愛されちゃって、マフィア」(V)で極道の妻役をコミカルかつパワフルに演じて全米映画批評家協会賞の助演女優賞を受賞し、映画界にも旋風を巻き起こす。そして、本作での怪演によりアカデミー賞の助演賞候補となり、その名を世に知らしめた。映画新作は、91年トニー賞女優賞を受賞した「ヨンカーズ物語」の待望の映画化であり、期待を集めている、注目の女優である。

◆作品　79：ウォリアーズ　81：フォー・フレンズ　86：チャーリング・クロス84番街[V](84 Charing Cross Road／デイヴィッド・ジョーンズ)、心みだれて　87：それ行け!!マーチングバンド[V](Leader of the Band(ネッサ・ハイアムズ)、ラジオ・デイズ、摩天楼はバラ色に　88：ビッグ、愛されちゃって、マフィア[V](Married to the Mob／ジョナサン・デミ)89：ニューヨークの奴隷たち　90：クレイジー・ピープル　91：サギ師とウソつき患者、フィッシャー・キング　92：Lost in Yonkers(マーサ・クーリッジ)

amanda plummer

アマンダ・プラマー(リディア)

ペリーを虜にするニューヨークのロンリー・ウーマン、リディアを繊細に演じたアマンダ・プラマー。1957年3月23日NYの生まれ。父クリストファーと母タミー・グライムズは共に役者だが、彼女が3歳の時に離婚。大学で演技を専攻後、ネイバーフッド・プレイハウスに入る。79年“Artichoke”でシアター・ワールド賞に選出され、翌年は同作品でトニー賞女優賞候補に。一方、「アグネス」では同賞の主演女優賞とドラマ・デスク賞も受賞し、演技派女優として脚光を浴びる。また、87年は「ピグマリオン」で再度トニー賞女優賞候補となった。

映画は、ダイアン・レイン共演の「Cattle Annie and Little Britches」(81)でデビュー。翌年、ロビン・ウィリアムズ主演の『ガープの世界』で聾唖の女性を演じ注目を集めた。以来、舞台活動の合間を縫って、映画への特別出演、TV映画の主演などをこなし、TV『トゥルー・ブルー』のパイロット版にもゲスト出演した。そして今回、映画での初めての大役を演じ、絶賛された。

◆作品　80：Cattle Annie and Little Britches(ラモント・ジョンソン)82：ガープの世界　83：ダニエル[V](Daniel／シドニー・ルメット)84：ホテル・ニューハンプシャー、The Dollmaker(ダニエル・ペトリー)85：Static(マーク・ロマネク)87：Courtship(ハワード・カミングス)、メイド・イン・ヘブン　89：Prisoners of Inertia(J.ノイス・シャー)90：ジョー満月の島へ行く[V](Joe ver'sus the Volcano／ジョン・パトリック・シャンリー)91：フィッシャー・キング



PRODUCTION NOTES

ブリリアントな脚本に魅せられて…

●数年前、脚本のリチャード・ラグラベネスは、〝神話〟の要素を取り込んで初めてのソロ作品を書き上げた。作品「フィッシャー・キング」は、彼自身の言葉を借りれば〝オフビート〟。せいぜい独立系の小品として映画化されれば、との思いだったというが、製作のデブラ・ヒル、リンダ・オストの反応はまったく違っていた。オストは言う。

「読み始めたら止まらないとはあのこと。ちょうど外出しなければならず、運転しながら膝の上でページをめくってた。日曜にもかかわらず、早速エージェントに連絡したわ」

●ヒル／オストの指名を受けて、次に脚本を読むことになったのは監督のギリアムだ。

「ブリリアントな脚本に感銘し、自分の世界と非常に似たものを感じた。おかしさと哀しみと驚き。登場人物たちはいずれもパワフルなエモーションに充ちている。こんな脚本を書きたかったと、少なからずシットしたよ」

ギリアムはかつて〝モンティ・パイソン〟時代に〝聖杯〟テーマを扱っている。その作品に常に中世志向が目につく彼には絶好の素材だった。

「大掛りなＳＦＸを駆使することが多い私は、これまで自他共に〝フィルムメーカー〟を認じていた。しかし、この作品では〝ディレクター〟に徹しようと思った。たった４人のキャラクターでグッド・フィルムを作ってみたかった」

製作に当たって、ラグラベネスは通常の脚本家の枠を超えて作品に関与した。プレプロダクション、リハーサル、撮影本番…すべての段階で監督ギリアムや出演者たちと行動を密にしたラグラベネスについて、「作品のすべてを把握する原作者に、直接いろいろな場面で尋ねることができたのは価値あることだったよ」と語るのはジェフ・ブリッジズだ。

〝聖杯伝説〟について――

●本編でパリーたちが探索する〝聖杯〟とは、キリストが「最後の晩餐」に用い、彼が十字架にかけられた後、その血を受けたとされる杯。アーサー王の円卓の騎士たちや十字軍など、中世以降のヨーロッパでは〝聖杯探索〟にまつわる伝説が後を断たないが、聖杯の守護者だったとされる〝フィッシャー・キング〟もその一つ。

「裏切りと悲劇に充ちたフィッシャー・キングの生涯が終末に近付いた時、王国は滅亡へと向かい、その力の源となっていた聖杯も彼の手元を離れる。しかし、一人の道化者がそれを見つけ、死の床にある王のもとへ返す。道化者はピュアで無心な魂の象徴であり、王を死の苦痛から解放する憐れみの心を証明している」と、伝説の由来とドラマとの関係についてギリアムは説明している。



現代ニューヨークを中世に見立てて――

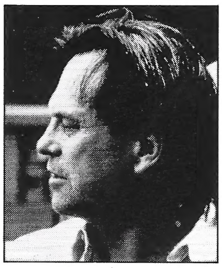
●撮影は、屋内シーンを除いて現地ニューヨークで行われた。

「中世のフェアリー・テイルを思わせる重厚さとモニュメンタルな雰囲気を」

ギリアム監督の意を受けてプロダクション・デザインに腕を奮ったのは、オスカーに２度ノミネートの名手メル・ボーンだ。中でも目を奪うのは、ペリーの想像の産物として〝聖杯〟が置かれているとされる、大富豪カーマイケルの城を思わせる巨大な別邸。これにはマディソン街49番通りにあるアメリカ造兵廠（しょう）が見立てられた。ステンドグラス・ガーゴイル（怪獣などの頭をかたどった水落し）、二層階段などがカリフォルニアから運び込まれ、ニューヨークとは到底思えない〝威容〟と〝時代色〟をかもすことに成功している。

●一方、篇中一番のスペクタクル・シーンとして、これぞギリアム・タッチとでも呼びたいのが、グランド・セントラル・ステーションに1000人のエキストラを動員して撮影された〝通勤客の突然ワルツ〟のシーンだ。同駅への通勤一番列車が到着する朝６時10分に合わせて、２日間に渡って撮影されたもので、到着した列車から吐き出された人々が、突然に優雅なワルツを踊り始めるシーンは、奇抜さを通り越して、素晴らしく壮観だ。これが最初の脚本には無くて、撮影が始まってからのギリアムのアドリブだというから、いかにも彼らしい。

●また、パリーの悪夢（脅迫観念）の象徴として篇中いくどとなく不気味な姿を現わすのが、巨大な馬に股がった〝赤い騎士〟の異様。ギリアムのビジョンに基いて、ボーンと衣裳デザインのキース・グレコ、ビンス・ジェファーズが「悪の象徴として500年間も生き続ける〝死の騎士〟」をコンセプトに設計した。甲冑や飾り物を含めて総重量16ポンドのコスチュームを身につけて馬上の人となったのが、スタント・コーディネーターのクリス・ハウエル。彼を乗せて、真夜中のニューヨークを疾駆したのは、サーカスで使われていたペンシュロン種（荷馬）の去勢馬で、体重１トンに近い巨大ぶりだ。



監督　TERRY GILLIAM
テリー・ギリアム

英のオフビート・コメディ集団〝モンティ・パイソン〟の頭脳的存在から、いま一番目が離せない監督へ——。次々と変化するその奔流のようなイメージを、ロビン・ウィリアムズは「どんな心理学の大家だって分析不可能」と絶賛している。

1940年11月22日、米ミネソタ州ミネアポリスの生まれ。カリフォルニアのオクシデンタル・カレッジでは政治学を専攻したが、卒業後、得意の絵を生かして、漫画家としてデビュー。雑誌〝Help!〟の仕事をしていた時、〝MP〟のジョン・クリースと出会い、BBCの彼らの番組「空飛ぶモンティ・パイソン」にアニメーターとして参加。〝MP〟映画「モンティ・パイソン・アンド・ホーリー・グレイル」('75）などの演出をメンバー共同で手がけた後、'76年、「ジャバーウォッキー」でソロ監督としてデビューした。

ソロ第2作「バンデットQ」('81)は全米興収5千万ドルを超える大ヒットを記録。第3作「未来世紀ブラジル」('85)では配給のユニバーサルとの間で最終編集権をめぐって争いながら、タイム誌の〝テン・ベスト〟、LA映画批評家協会作品・監督賞などの栄誉を獲得。'88年には金に飽かせたSFXで度肝を抜いた世紀の大作「バロン」を発表した。

役者もこなし、本作を除く監督作すべての脚本も担当。掛け値なしの天才とは、彼のようなことを言うのだろう。

メーキャップ師のマギー夫人との間に3児がいる。

◆作品（特記以外は監督・脚本作）
71：モンティ・パイソン・アンド・ナウ（出演・脚本・原案・アニメ）75：モンティ・パイソン・アンド・ホーリー・グレイル（出演・アニメ・脚本）76：ジャバーウォッキー　79：ライフ・オブ・ブライアン（出演・脚本・美術・アニメ）81：バンデッドQ（製作も）82：モンティ・パイソン・ライブ・アット・ザ・ハリウッド・ホウル［V］（Monty Python Live at the Hollywood Bowl／出演・脚本）83：モンティ・パイソン・人生狂騒曲［V］（Monty Python's Meaning of Life／出演・脚本・部分監督・アニメ）85：未来世紀ブラジル、スパイ・ライク・アス（出演のみ）88：バロン　91：フィッシャー・キング

製作　DEBRA HILL
デブラ・ヒル

雨後の筍のように輩出する女流監督とともに、プロデューサーも最近は〝女の時代〟。ゲイル・アン・ハード、シェリー・ランシング、キャスリーン・ケネディ…そしていまデブラ・ヒルだ。

米ニュージャージー州ハドソンフィールド生まれ。プロデューサーになる前は、スクリプト・スーパーバイザー、編集、助監督など、多様な分野の仕事をこなしてきたヒル。製作・脚本を手がけた第1作「ハロウィン」('78)を皮切りに、「ザ・フォッグ」('80)、「ニューヨーク1997」('81)など、5本の作品に監督ジョン・カーペンターとコンビを組み、業界に一躍その名を高めた。

その後、デビッド・クロネンバーグの「デッド・ゾーン」('83)を手がけ、'85年、長年の友人リンダ・オストと組んで〝ヒル／オスト・プロ〟を設立。クリス・コロンバスと組んだ「ベビーシッター・アドベンチャー」('87)、「ハートブレイク・ホテル」('88／未)や「メディカル・レッスン」('89／V)などの話題作を発表している。

脚本　RICHARD LaGRAVENESE
リチャード・ラグラベネス

初めての単独シナリオで、アカデミー脚本賞の候補となったラグラベネス。ニューヨーク大学の実験劇場ウィングで演技のトレーニングを始め、後にコメディ・チームを結成して、台本を担当した。

89年に、60年代の長髪ヒッピーが現代に現れるエリック・ロバーツとチーチ・マリン共演のコメディ「Rude Awakening」をニール・レヴィと共同執筆し、脚本家デビュー。続く今回のシナリオで成功を収め、一躍注目を集めた。

なお、監督のギリアムとは神話学という共通の興味で意気投合し、プレプロダクション、リハーサル、撮影中を通じてギリアムと結託して共同作業を続け、アメリカ映画では映画協会の著作権問題で変更の難しい、撮影現場での脚本の変更にも応じる柔軟な姿勢を見せ、希少な存在として評価された。今後の活躍が期待される。

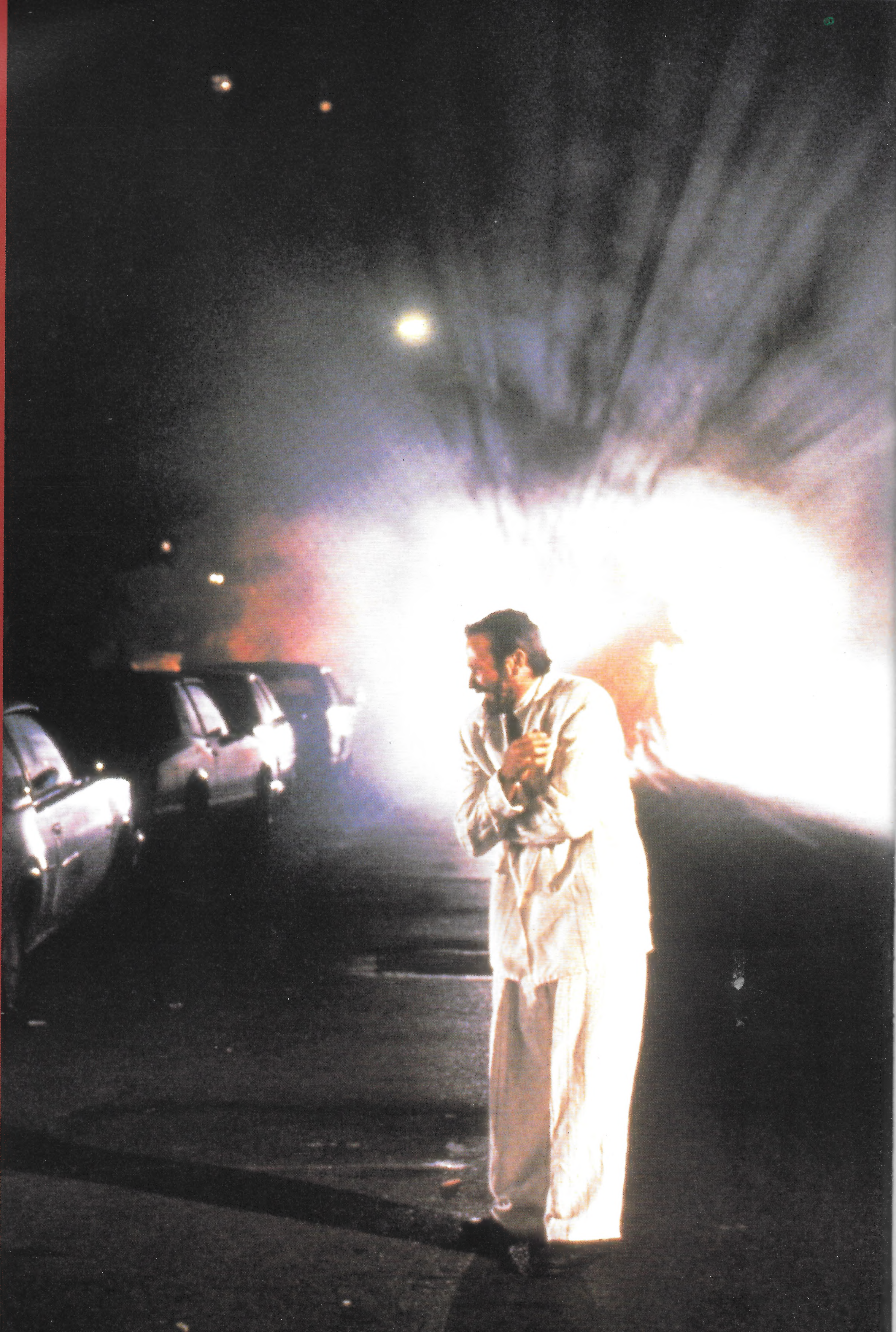
美術　MEL BOURNE
メル・ボーン

シカゴ生まれ。イェール・ドラマ学校で学んだ後、『奇跡の人』(62)の美術デザイン助手をつとめた後、ブロードウェイの舞台美術デザインを始める。77年の『アニー・ホール』で映画に進出し、『ブロードウェイのダニー・ローズ』(84)までの充実期のウディ・アレン作品を手掛けて名声を得、中でも『インテリア』(78)はアカデミー美術賞候補となった。こうして都会派のデザイナーとして評価を得、以後、再度同賞候補となった『ナチュラル』(84)を始め、『F／X』(86)、『危険な情事』(87)、『告発の行方』(88)、『カクテル』(88)、『運命の逆転』(90)などの話題作を担当。

また、89年はラグラベネス脚本の『Rude Awakening』も手掛けており、今回、再び彼の脚本作品を担当することとなり、壮大なギリアムの世界をデザイン、3度目のアカデミー賞候補となった。

音楽　GEORGE FENTON
ジョージ・フェントン

71年「Private Road」（バーニー・プラッツ＝ミルズ監督）に出演すると同時に音楽も担当。74年にピーター・ギル演出の「十二夜」で舞台音楽の仕事を始め、ギル監督の「Hitting Town」(76)でTV映画に進出。79年、映画に進出。S.フリアーズとは「Bloody Kids」(79)、「Saigon, Year of the Cat」(83)、『危険な関係』(88／アカデミー賞候補）で、アッテンボーとは『ガンジー』(82／ラヴィ・シャンカル共作）と『遠い夜明け』(89)で組み、両作でアカデミー候補に。また「The Jewel in the Crown」(83／英アカデミーTV音楽賞受賞）と「The Dressmaker」(88)でジム・オブライエンと、「Runners」(83)と『ハンドフル・オブ・ダスト』(88)でC.スタリッジ、『狼の血族』(84)、『ブランケット城への招待状』(88)、『俺たちは天使じゃない』(89)でN.ジョーダンと組んでいる。他に「チャーリング・クロス84番街」［V］(85)、『白い炎の女』(87)、『メンフィス・ベル』(89)、『僕の美しい人だから』(90)等。



〝傑作!……今年の最高作品のひとつ。
ウィットにあふれ、知的で、想像を絶する作品〟
〈ジェフリー・ライオンズ氏/スニーク・プレビューズ〉

〝驚くべきコメディ。
大胆で、ユニークで、爽快なシネマチック・トリップ〟
〈ブルース・ウィリアムソン氏/プレイボーイ誌〉

〝マジック! ロビン・ウィリアムズは凄く面白い。
「フィッシャー・キング」はおかしくて、悲しくて、
うっとりするようなロマンスの波に乗せてくれる〟
〈ピーター・トラバース氏/ローリング・ストーンズ誌〉

〝真に偉大なる映画!
「フィッシャー・キング」はロビン・ウィリアムズを
オスカー・キングにするだろう〟
〈ジョエル・シーゲル氏/グッド・モーニング・アメリカ〉

〝個性的で、斬新で、ワイルド。
テリー・ギリアム監督は驚くべき映像美で
見るものをはっとさせる〟
〈ジーン・シャリット氏/ザ・トゥディ・ショー〉

〝ジェフ・ブリッジズはセンセーショナル。
セクシーで、傷つきやすく、魅惑的で、タフ〟
〈パット・コリンズ氏/WWORテレビ〉

〝楽しさいっぱい……
テリー・ギリアム監督の映画魔術を証明する作品〟
〈リチャード・コーリス氏/タイム誌〉

〝ワイルドで快活な作品。
……ホットな演技。
ロビン・ウィリアムズは陽気で、コミカルな輝きを放っている〟
〈デビッド・アンセン氏/ニューズウィーク誌〉





THE FISHER KING

スタッフ

監督……テリー・ギリアム
製作……デブラ・ヒル
リンダ・オスト
脚本……リチャード・ラグラベネス
撮影……ロジャー・プラット
プロダクション・デザイン……メル・ボーン
編集……レスリー・ウォーカー
音楽……ジョージ・フェントン
衣裳……ベアトリックス・パスター
SFXコンサルタント……ロバート・E・マッカーシー

キャスト

パリー……ロビン・ウィリアムズ
ジャック・ルーカス……ジェフ・ブリッジズ
リディア……アマンダ・プラマー
アン・ナポリターノ……マーセデス・ルール
キャバレー・シンガー……マイケル・ジェッター

THE CREW

Director……TERRY GILLIAM
Producers……DEBRA HILL
LYNDA OBST
Written by……RICHARD LaGRAVENESE
Director of Photography……ROGER PRATT, B.S.C.
Production Designer……MEL BOURNE
Editor……LESLEY WALKER
Music by……GEORGE FENTON
Costume Designer……BEATRIX PASZTOR
Creative Special Effects Consultant……
ROBERT E. McCARTHY

THE CAST

Perry……ROBIN WILLIAMS
Jack……JEFF BRIDGES
Lydia……AMANDA PLUMMER
Anne……MERCEDES RUEHL
Homeless Cabaret Singer……MICHAEL JETER

1992年4月4日発行
発行所　東京都千代田区有楽町1—2—1　東宝・出版事業室
発行者　東京都千代田区有楽町1—2—1　大橋雄吉
© 発行権者　東京都港区浜松町2—8—14浜松町TSビル
㈱ソニー・ピクチャーズエンタテインメント
コロンビア トライスター映画事業本部
編集　東京都千代田区有楽町1—8—1　㈱スタジオ・ジャンプ
印刷所　東京都港区芝2—1—28　成旺印刷株式会社
定価400円(税込み)

ROBIN WILLIAMS

JEFF BRIDGES

THE FISHER KING

TRI-STAR PICTURES PRESENTS A HILL/OBST PRODUCTION A TERRY GILLIAM FILM ROBIN WILLIAMS JEFF BRIDGES "THE FISHER KING"
AMANDA PLUMMER AND MERCEDES RUEHL MUSIC BY GEORGE FENTON EDITOR LESLEY WALKER PRODUCTION DESIGNER MEL BOURNE DIRECTOR OF PHOTOGRAPHY ROGER PRATT, B.S.C.
DOLBY STEREO™ IN SELECTED THEATRES WRITTEN BY RICHARD LaGRAVENESE PRODUCED BY DEBRA HILL AND LYNDA OBST DIRECTED BY TERRY GILLIAM

ORIGINAL SOUNDTRACK ALBUM AVAILABLE ON MCA RECORDS, CASSETTES AND COMPACT DISCS

DISTRIBUTED BY COLUMBIA TRI-STAR FILM DISTRIBUTORS, INC.

© 1991 TRI-STAR PICTURES, INC. ALL RIGHTS RESERVED

Columbia Tri-Star Films (Japan) Ltd

東宝